様式第１号（第３条関係）

【公　開　用】

【足立区地域自立支援協議会こども部会】会議概要

会　議　名	平成３０年度　第１回　【足立区地域自立支援協議会こども部会】
事　務　局	福祉部　障がい福祉センター
開催年月日	平成３０年７月２６日（木）
開 催 時 間	午後１時３０分　～　午後３時３０分
開 催 場 所	障がい福祉センター　研修室３
出　席　者	別紙のとおり
欠　席　者	別紙のとおり
会 議 次 第	１　次第 （１）障がい福祉センター所長挨拶 （２）委嘱状授与 （３）委員紹介 （４）事務局紹介 （５）足立区地域自立支援協議会の体制変更について ２　議事 （１）部会長挨拶 （２）協議（意見交換） （３）次回の会議開催日時確認
資　　料	第１回こども部会次第・席次 こども部会の今後のあり方･進め方に関するメモ 平成３０年度　地域自立支援協議会本会議資料
そ　の　他	

様式第２号（第３条関係）

（協議経過）

１　次第

（１）障がい福祉センター所長挨拶

〇障がい福祉センター所長　７月２３日に足立区地域自立支援協議会本会議が開催された。６つの部会長から今後の進め方の説明があった。今回こども部会開催が１回目ということで、課題は多くあるが有意義な話し合いが出来ればと思う。

（２）委嘱状授与

障がい福祉センター所長から委員へ委嘱状授与。

（３）委員紹介

部会長及び委員より自己紹介

（４）事務局・オブザーバー紹介

（５）自立支援協議会の見直しについて

〇事務局（地域生活支援担当係長）　足立区の自立支援協議会は、平成２０年１０月に設置された。障がい需要が高かった足立区は、もともと様々なネットワーク会議体が存在しており、その既存の会議体を自立支援協議会にも活用していた。そのため、「既存の会議体のため、障がい者が地域で生活していく視点が不十分」、「既存の会議体のため、専門部会委員の『自立支援協議会としての専門部会』という認識が薄く、会議体のみで完結している」という課題があった。

見直しでは、従来は障がい者施策に密接に携わる機関、団体のみが集まっていたところを、民生児童委員、一般の地域幼稚園長・保育園長などの参加を促し、広く地域の現況の課題の洗い出しを図れるような体制づくりを目指した。障がい者計画、障がい者･児福祉計画の策定にあわせて改正し、その結果、専門部会は、「くらし部会」、「はたらく部会」、「こども部会」、「相談支援部会」、「権利擁護部会」、「精神医療部会」６つの部会に分けられた。

年度当初、自立支援協議会本会議で決定された検討事項を、各専門部会で話し合い、年度末の本会議にて報告し、さらに検討を加える。その報告書を委員長の筑波大学大学院の小澤先生にとりまとめていただく。その後､報告書は､事務局を所管する部長、福祉部、衛生部、こども家庭部等に提出する、という流れになる。

２　議事

（１）部会長挨拶

〇加藤部会長　公私ご多忙のなか、足を運んでいただいてご苦労さまです。２３日、あしすと５階ホールにて本会議があった。今年度の方向性を確認されたうえでの本日の部会となる。あらかじめ依頼を受けた部会長が意見陳述を行った。その際に配布した資料が本日も配布しているものとなる。こうした方向で進めていきたいと申し上げ、ぜひ部会でもご同意いただき、地域の子供たちの幸せのため、ご家族の安心のために努力していきたいと思う。今日は今日なりの結論を出してそれに繋げたい。

こども部会は足立区でそれなりに歴史がある。前回から委員として参加している。年２回程度しかなく、名刺交換位で終わってしまっていた。課題は沢山あり、思いは同じだが議論する場がない。この部会が数少ない場と思っている。そういう場がない以上地域のこどもたちのために、実りある成果をだしていきたい。

メモ読み上げ後、質問、ご意見があれば出してもらい、積み上げて議論を進めて行く形をとっていきたい。報告書を提出し、時系列な形で積み上がっていければと思う。

―資料読み上げ―

この部会は身近な行政主体が中心となって議論できる場が公的に位置づけられたと思う。

足立区においては足立こども福祉フォーラムを２０年やってきた。足立区のこども関係機関が最高３３機関集まり、年１回大会を実施し、企画委員が集まり、大会に向けて意見交換をし、その都度団体が持っている課題の議論や共有をした。こういう場が欲しかったため、そのことをいろいろな場で訴え、自立支援協議会が出来上がってきた。こども部会にそのまま引き継がれていくと思い、反対もあったが一度幕を引いた。しかしそれが繋がらず、あの時の我々の精神を再現させたい、足立の地でこどもにかかわる関係者が総動員でかかわる場になればと思っている。一人一人こどもに向き合っている以上、我々には責任があると思って臨んでいただきたい。

提案１補足

症例は限りなくスペクトラム、グラデーション。我々も困り感を持って生きており、相対的である。障がいだからという逆差別的なことはナンセンス。困り感を持っている方に寄り添う姿勢が求められている。

提案２補足

表には出ていないけれど、不満、怒りなどの解消への実践的な議論をしたい。

提案３補足

限りなく私生活に我々の議論を反映させていきたい。

提案４補足

発言には等しく価値がある、資格、職種など関係なく、遠慮せずに陳述して欲しい。毎回何らかの行動指針を出し、確認していく。

提案５補足

スピード感を持って進めるためには、参加者が役割を持って参加することがいいのではないか。更に作業班は隔月にしたい。年２回でこれだけ錯綜する議題を議論しても煮詰まらない。不全感が残る形になってしまう。最初は委員はボランティアだったが、今回は各委員に報償費が出るようになった。それだけ足立区も我々に期待している。日当が出るのは画期的な前進である。税金をいただきながら、こどもの幸せのための活動ができるのは素晴らしいことだ。かなり過激なことも申し上げているが、主旨をご理解いただきたい。会議は多くの場合言いっ放しになりがちですができるだけ我々が主体的に担えたらと思う。ご意見をいただきたい。それぞれの現場で持っている課題は自分たちだけでがんばりきれないのは明らかであり、このような場で関係者が貴重な時間を費やして集まっているので、積極的な議論をしていきたいと思う。

〇江黒委員

一番の相対的な困り感を感じているところがあるが、昨日な推進協でもグレーなお子さんにも支援をお願いしますと意見があった。こういう発言をするというのはグレーでも淡いグレー、濃いグレー、限りなく黒にちかいグレーがある。障がいというものをグレーと例えて生きているために生きにくさ、困り感を抱えているご家族がいる。いろいろな意味でいろいろなお母さま、お子さんから意見を聞いていただきたい。予算を組んだ以上、責任がある。責任感をもって、お子さんたちのことを考えられる会議になるといいと思った。

〇加藤部会長

みんなグレーだと思う。真っ白、真っ黒なんてそうはいない。場面に応じて、人は社

会の中で生きている。その中をゆれうごいて、それで世の中が構成されている。障がいであろうとなかろうと困っているという人がいれば、さっと手が出せる姿勢が大事であって、障がいあるから、ないからという話ではないと思った。

〇林田委員

グレーのお子さんへの支援、特別支援学校もセンター的機能というのがある。蓄積した専門性を地域にと、外部支援で学校に伺っている。あのお子さんみてくださいと言われるお子さん以外で気になるお子さんが沢山いる。草の根的な活動だが、状況的には変わってきていると思っている。なかなか全体的なものにならないと感じている。

更に特別支援教室という形ができ、学校間で困り感を集積し、フィードバックしてくれる。それは大事なことだと思う。ただ保護者の同意が必要で、支援が入っていかないところがある。

放課後等デイサービスができ、障がいを持っているお子さんが放課後を過ごす場が提供されたのはいいと思う一方で、放課後等デイサービスが増えすぎて、家以外で過ごす場がありすぎて、土曜日も日曜日も使っているという状況が目につくようになってきた。放課後等デイサービスの内容等も大きな問題と思っている。

〇加藤部会長

皆さんにもあとで時間を差し上げますので、今こどもに関しての課題と思っているものを３つあげていただき、その中身を共有したいと思っている。そのこどもたちがどんな困り感を持って生きているか共有する必要がある。また行政ベースのデーターベース、年間出生数が５，２００から３００。この中に要支援児、保健所等で気になるお子さんがどれ位いるか。こうした児童が例えば５歳児がどういう生活の場で生活しているか。１割のこどもたちが支援を要している実態がある。足立区はどうか。そのこどもたちがどこで生活をしているか。放課後等デイサービスも考えれば考えるほど悩ましい問題、親の就労政策とこどもの支援がすり替わってしまっている。あのボタンの掛け違いは修正していくべきと思っている。そういう事態が起きていることは地域に当然ある。基本的にこどもがどんな実態で生活しているかの基礎データは抑えていく必要がある。それを共有した上で考えていくことが一つ。それからみなさんから出していただいた話を同じ水準で扱っていては時間が足りないため、優先順位をつけ、今の我々陣容で何ができるのか、建設的な意見やアクションが出てくるのではと思っている。

〇梅田委員

本校は特別支援教室が今年からできて二人担任。沢山のお子さんが希望されて利用している。通常学級にも課題のあるお子さんが在籍していて、大変な様子である。特別支援学級は１９校あるが、どこもほとんど満杯。空いている学校があるとそこに集中してしまう状態がある。

議論が生活に反映されることが大事なことだと思う。

〇加藤部会長

部会のミッションについて、合意をいただいたととらえてよろしいですか？

挙手でお願いします。

全会一致で合意いただいたと。

それぞれの立場でご意見いただけたらと思う。

〇羽住委員

最初に申し上げると民生児童委員で、こどもを中心していないので、個別事例はな

い。専門でいないことが根底にあるので、いろいろな立場の施設などに年３、４回伺い、そこでどのような取り組みをしているかなどを勉強している。地域のお子さんの場合もありますが、専門的には十分にかかわれていない状況という立場です。こどもということを考えると、いろいろ聞いたことを委員の方に伝える役割として参加させていただいていると考えている。

民生・児童委員は地域と行政との橋渡しをしている。地域の見回り役的な存在となっている。

〇加藤部会長

地域での安心安全な暮らしという点で大事な方たちだと思っている。議論に加わってもらうことに大きな意味があるかと思う。

〇寺山委員

第一に幼稚園では早期教育、就学前教育を行うが、私たちの一番のテーマはその子の困り感の軽減である。一人ひとりに困り感が沢山あり、集団になじめない子をどうしていくか。３０人に１人の教員ではなかなか手が回らず、私たちでは、積極的に横の連携として、あしすと、あけぼの、葛飾ろう学校から教員も指導を受け大変助かっている。横の連携で困っている中では、困っている親が増えてきているが、相談できる場が少ないと感じる。区に要請したいこととして発達支援の窓口を増やしてほしいという意見も聞いている。

第二に毎日教育を行っているうえで、親支援が大きな課題となっている。お子さんも幼稚園だけ、４時間の保育時間、預かりで１０時間超行っている。家族、地域でこどもを育てたい等気持ちがあるが、子育て支援という名の就労支援で、預けっぱなし感が強くなっている。親の困り感がなくなれば、こどもも育つと思っているが、最近は親支援もうまくいかないと思っている。

第三は親の意識の改革だ。支援児、支援児ではないという以前に、今は外部機関があり、就学にあたっても特別支援教室も増えている。いろいろな支援の機会があるにもかかわらず、私のこどもは障がい児ではない、うちのこどもは支援は必要ありませんという頑なな方が結構おり、阻まれてしまうことがある。社会的な意識の改革かもしれないけれど。

〇渡辺義也委員

あだち福祉フォーラム、私も１３回位参加していた。その後もいろいろなところで繋がりがあって、いい会だったと思う。フォーラムではいろいろな話がされていて、災害のネットワークや、障がいの当事者の自主グループを作ったりと、自主的に活動できた場であったと思う。

この会と同じかどうか別として、何かできればと思う。

お母さんが集まり広めていく場として保育園、幼稚園は一つの場と思っている。今後少子化で生き残り策を考え、地域や法人との連携は考えていかなくてはいけないと思う。区内社会福祉法人も連絡会ができて連携を取るようにしている。あけぼの学園でやっているこども食堂は、うちでもやっている。先進的なことを担っていただくのがからしだねさんだと思っている。

こどもたちの問題では、話が理解できない、通じない親の問題が出ている。いろいろなところが困っていると感じている。２０２０年スマホ登場から２０年で、その影響がでてくると思っていると感じている。

〇渡辺直子委員

障がいのある子を育てた親が相談に乗っているが、まず最初にどこに電話すべきか困るという声をよく聞く。療育機関も混み

合っていて、お医者さんもどこにいったらいい、など一か所で相談できて、適材適所につなげる場がないかと思っている。保護者の困り感に共感することはできるが、わたくしたちもどういう機関につなげばいいのか勉強させていただけたらと思う。

保育園の発達コーディネーター研修に参加した際、参加者が一生懸命勉強されていたのはありがたいと思う。

〇松永委員

放課後等デイサービスは、かつては保護者が今の保育園と同じように、頭をさげて入所するという状況だった。今は数が増えていて、淘汰されるのはいいと思うが、使えるものはタダだから使っておこうという状況もある。最近の保護者をみて思うのは、保育園、幼稚園は預けていても悪いと思っていない。でも放課後等デイサービスの利用者はまだそんな風に強くなっていない印象がある。障がいがあろうとなかろうと、みんなで手を繋いで、いい方向に固めていく姿勢が必要と思うが、事業所側が保護者にだめだと思わせている部分があると思っている。個人的には放課後等デイサービスがあまりに増えている。あんまりいいことではないと思っている。早急に事業所単位で連携を取っていかなくてはいかない。あわせて、災害、防災という面で、非常に規制が弱い。少なくとも、最低限の防災、災害について底上げして行きたいと思う。

〇狩野委員

中学校の特別支援学級の担任として、一点目は不登校の子の、具体的な行き場がない状況がある。中学校としてはその後高等部に送り出しても、やはり高等部に行けないことがある。教員として何かその子に力をつけてあげられないのかと思っている。次にどこに繋げるかの繋ぎ先がなく、繋がりを作って送り出しをしたかったが、現状としてそのままになってしまうことがある。

もうひとつ、障がいのありなしで分けられてしまう現状の体制の中で、保護者の方の同意が必要となると、障がいへの理解が難しく、わが子には障がいはないということになってしまう。このあたりどうやって連携しながら進めていき、こどもにとって一番いい形でかかわっていけたらと思う。

〇梅田委員

こどもの課題ということでは、一つは地域の教育力の低下がある。昔は頑固おやじや困っているお母さんに口を出してくれる人がいた。今はかけこむところが公共機関しかなくなってきている。それから子どもの経験の不足がある。こどもたちがいろいろな経験をすることが不足している。こどもだけで解決するような瞬間がかつてはあった。今は親の世代も経験が不足している。運動能力も低下している。

インクルーシブを訴えながら予算は厳しく、担当者は苦労していると感じている。

〇竹内委員

我が子が特別支援学校に在籍している。

委員の皆さんから「親御さんの」と言われる度に、そうだなと聞いていた。肢体　不自由の子をもつ親としての困り感としては、バスに乗せて学校へ送り出してしまうので、地域とのかかわりが少ないと実感している。副籍交流を続けて行ったが、地域の中に入りこんだと思うとそうでもないかとも思う。防災のことを考えるとこの地域でどう避難するとか、この地域に私たち家族が入っているかというとまだまだだと思う。放課後等デイサービスにもお世話になり、そこでは縦の関係もあって、それでも地域の公園で遊ばせることができたかというとそれは数えたくらいしかない。同時に親同士のか

かわりも少ない。

〇内山委員

相談の窓口を担当しているため、９割は保護者からの相談をうけている。診察に繋がるまでに最短で２か月かかるのが現状。私たちに相談してきたときは覚悟を決めて相談してくる状況で、２か月待ちとなってしまい、場合によっては４か月待ちでお子さんが月齢を重ねていく。療育施設の、お子さんたちの入り口の部分でお母さんたちの不安を受け止め切れていないと日々感じている。相談の場所が増えても療育の場が少ないことも実感している。

家族との同行通園を行っている。やはり障がい、重度の障がいをもっていると育てにくさがあるので、家族の力がすごく必要になると思う。お子さんと向かい合う辛さもあるのかもしれないが、お母さん自身が人に任せるにあたり、就学の時にお子さんのことがよくわからないまま次のステップに繋げてしまうことがあるのかなと思う。卒園するころには家族全員でかかわるような、わが子としっかり向き合えるようにするのが親支援と思っている。

〇田中委員

ろう学校なので、聞こえないお子さんをお預かりする学校であり、聞こえないことの発見の部分がある。新生児聴覚スクリーニングを受けて、母子手帳に記載するシステムになっているが、再検査と言われた親御さんが、次にどうしていいかわからないことがある。検診の際に発見されないで、発見が遅れるケースもある。発達障がいは最近注目されているが、聞こえない子は発達障がい似た様子がみられる子もあり、検診などで保健師さんにあれっと思ったら聞こえないのではと疑ってみていただきたい。インクルーシブという点では聞こえない人たちの文化的なコミュニティ、聾者と生きる価値観、手話という言語を使った文化もあるという見方も必要。それぞれ自分と同じような文化に入ってほしいと思うのは当然だが、手話などの抵抗感などを払拭してかかわっていけたらと思う。病院、保健師、学校など、こどもに自然にかかわれるような教育をおこなっていただけるとありがたいと思う。

〇清水委員代理

出来る、出来ない、の見方ではなく、職員一人一人のスキルアップ、チーム力の向上、他機関連携が大事だと思う。

インクルーシブマインドを持っていくことは、難しいことだと思うが必要だと思う。

こどもひとりひとりの育ちに合ったかかわりが必要である。目的によって、保護者に同意を得て、行事も含めた新たな保育を創造していくことが一番の課題かと感じている。

保護者にとっても保育園での一人ひとりへの保育だが、これが学校に行くとそうでなくなってしまう。小学校との連携は、当たり前と思うが、不十分と思っている。

先日悲しい報告を保護者から受けた。ダウン症のお子さんでスーパーの店内でカートに乗せたところ、出入り禁止になってしまった。私はただ聞くことしかできなかったが、社会の仕組みを変えていく必要性があると思った。

これからどうしていくのか、この会でお話できたらと思う。

〇加藤部会長

皆さんの熱い思いをお話しいただき、ある程度マトリックスにして共有し、優先順位をつけて今後進めていきたいと思う。

この会、差し支えなければメーリングリストを作ったらいかがかと思う。皆さんに

お願いしますということで迅速な議論な展開にはこういうツールを使っていければいこうと思う。

次回に向けて、加藤部会長よりそれぞれに宿題をお願いする。

・私立保育園連盟のリストと支援児の数（渡邉義也委員）
・私立幼稚園連盟のリストと支援児の数（寺山委員）
・民生児童委員の数とどこに住んでいるかの実態マップ（羽住委員）
・中学校固定級の数とリスト（狩野委員）
・小学校固定級の数とリスト（梅田委員）
・特別支援学校の在籍児と副籍児の数（林田委員・田中委員）
・城北分園の対象児の年齢と在籍児（内山委員）
・放課後等デイサービスの実態と在籍児数（松永委員）

次回に繋げるということで９月２１日によろしくお願いします。